

マリカ・モカデムにおける「混ざった」ヒロイン

タイトル(その他言語)	Les heroines “melangees” chez Malika Mokeddem
著者	武内 旬子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	65
号	1
ページ	31-53
発行年	2015-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001704/

ことに注目すべきなのは確かである。メルツ＝バウムガルトナーはまた、「interdire される（た）女性」に対し、「誰が *interdire* する」のかが示されない形であることを指摘し、暗黙のうちに女性にのしかかる社会的圧力を示唆しているのではないかと述べている¹⁸。女性性に注目するこれらの指摘に、この形は、欲望の対象にすることを禁じられた女、とも解釈できることを付け加えておきたい。本論でみていくように、モカデムによれば、アルジェリア社会は、満たされない欲望という巨大な宿痾を抱えており、「*interdite*」は欲望と憎悪を一身に受ける存在でもある。

1 「異邦人」の帰還

筆者は2002年の拙論で『追われた女』を、主人公スルタナが、「境界上の存在」としてのアイデンティティーを新たに選択しなおす（かつて外から強制されたものを、改めて自ら肯定的に引き受ける）物語として読み、女性たちとの連帯を希求しながらも、ポストコロニアル批評やフェミニズム批評が期待する読みを裏切るテキストでもあるとした。上でも引用した2003年のメルツ＝バウムガルトナーの論考でも、小説の冒頭ではスルタナは「統一性と永続性を基盤とするアイデンティティー概念を持っていた¹⁹」のだが、最後に「アイデンティティー — リゾーム²⁰」を持つに至るとされる。こうした「成長物語」は『追われた女』の重要な要素ではあるが、この小説がたしかに持つ「告発小説」という要素と、個人の変化とはどのように関わるのだろうか。『追われた女』は、告発小説として構想されながら、アイデンティティー探求の物語として書かれてしまったテキストとして読めるのではないだろうか。

1-1 告発小説として読む

1-1-1 告発はどのようになされるのか

冒頭、「私はクサル²¹で唯一の袋小路で生まれた（11）」と語り始める1人称の語り手（原文では過去分詞の形から主語が女性であることがわかる）は、南仏モンペリエ在住であり、小説全体がその語り手兼主人公スルタナが帰った

18 *ibid.*, p.134.

19 *ibid.*, p.126.

20 *ibid.*, p.128. ドゥルーズとガタリによる「リゾームの思考」をもとに、グリッサンがアイデンティティーをめぐる議論において用いた用語。ここではバウム＝ガルトナーの表記にしたがったが、グリッサンの原著では“*identité rhizome*”と表記。邦訳書では「リゾーム的アイデンティティー」と訳されている。c.f. GLISSANT Edouard, *Introduction à une poétique du divers*, Gallimard, 1996. 小野正嗣訳、『多様なものの詩学序説』、以文社、2007年。

21 “ksar”と表記されている。アルジェリア砂漠地帯の、土でできた住居からなる村。

故郷（アルジェリア南部の砂漠地帯に設定された村アイン＝ネフラ²²）での5日間のできごとから成り、彼女が再びそこを出る場面で小説は終わる。

スルタナはなぜ帰るのか。その理由は、テキスト中、自問としても他の登場人物からの質問としても問われはするが、「心理的」に読もうとするとあまり判然としない。故郷の村で医師として働いているかつての恋人ヤシンから手紙が届いていたらしいのだが、その内容や届いた時期は読者には不明のままである。トラモンタン²³が激しく吹いたある日、故郷で経験した砂嵐が思い起こされ、急にヤシンに電話するも、それを受けた看護師から彼が前夜に急死したことを告げられる。葬儀に間に合うようにとスルタナはあわただしく出発する。「なぜ突然、もう一度コンタクトをとりたいと思ったのか（12）」という自問に答えることもできず、小説の後半に至っても「なぜ帰ってきたのか自分でもわからない（178）」と言う。本人にもはっきりしない理由で行動することは充分あり得ることだが、モカデムの作品においては、故郷を離れた人物のノスタルジーがテーマ化されることはほとんどない。この小説でも、スルタナの心理のみから帰郷の理由を見出すのは難しい。

理由はむしろ、告発小説としての『追われた女』が語り手兼主人公の帰郷を要請するから、ではないだろうか。実際、作中でアルジェリア社会は激しい批判の対象になるのだが、批判が説得力を持つためにはどのような形式が有効だろうか。外部の視点が必要だが、同時に、現状のみならず過去の姿をも知る内部の視点もあった方が望ましい。『追われた女』は、スルタナとヴァンサン（後述）という二人の登場人物が交互に1人称の語り手となる章が規則的に交替する形式を持っている。部外者の視点としてはフランス人旅行者のヴァンサンのそれがあり、帰郷者としてのスルタナが、生まれ育った社会を外から見る視点を担う。この形式を成立させるために、ヤシンの急死を聞いて急遽旅立つという展開がとられたのではないだろうか。スルタナが砂漠地帯出身でモンペリエに住む医師という設定であることから、モカデムに近いと指摘する論者は多いが、そうした要素はあるにせよ、両者を同一視はできない。スルタナの帰郷は批判的語りを始動させるスイッチなのだ。

1-1-2 何が告発されるのか

では、そのように始まる小説において、アルジェリア社会批判の内容はどのようなものか。先にも述べたように、ここで批判されるのは、90年代に台頭したイスラム主義であるとされてきた。しかし、より重要な批判対象はそれ以前

22 モカデム自身アルジェリア西南部の砂漠地帯の村出身だが名前は異なり、また ksar に住んでいたのではない。

23 南仏特有の強い北風。モカデムの作品にはしばしば登場する。

のアルジェリア、或いは、今日に至るまで変わらないアルジェリアではないだろうか。しかも、批判の焦点は、宗教的問題でないのはもちろん、政治権力の腐敗や経済格差の拡大などでもなく、ほぼ、男たちの女性嫌悪に絞られる。二人の語り手、ダリラという少女、葬儀にやってきたサラ（ヤシンとスルタナの旧友。アルジェリア在住）、そして村の女性たち、それぞれの視点から、女性たちに対する様々な心理的、肉体的暴力が具体的に語られ、告発される。例には事欠かない。たとえばスルタナは、村に着くや否や、囁し立て、卑猥な言葉を投げつける男の子たちに囲まれる。

「私は忘れていない。私の国の男の子たちが病んだ子供時代をもっていることを。(中略) ごく若いうちから、異性はすでに、彼らの欲望の中で一つの幽霊、漠然とした脅威なのだ。(中略) 彼らが通り過ぎる女の子や女性たちに石やののしり言葉を投げつけることを私は忘れていない。愛撫すること、愛すること、たとえそれがまなざしによるもののみであれ、それを学ぶかわりに危害を加えることを私は忘れていない。私は忘れていない。(18)」

この箇所で特徴的なのは、「私は忘れていない」という表現が何度も繰り返されることである。眼前の状況に過去を再認しているともいえる。過去にも同様の経験をしたが、この社会は今も変わっていない、と。上記引用に続く箇所では一人の子供から「売女(18)」という言葉が投げつけられ、「私は跳び上がる。(中略) この語は私にアルジェリアをナイフのように突き立てる(18)」と、「アルジェリア」を、自分を攻撃する暴力的存在としてとらえていることが読み取れる。なお、ここで「病」のメタファーが用いられているが²⁴、ヴァンサンの独白にも「それほど、(アルジェリアの) 男たちの(女性に対する) 敵意は大きく病的だ(66)」という表現がある。もちろん、イスラム主義者の村長が、ヤシンの住んでいた官舎に男性といっしょに泊まっていたスルタナに激しい非難をあげて恫喝する場面や、最後に男たちがその官舎に放火することなど、現在進行形の暴力も書き込まれている。そして、それらの暴力は、過去の暴力と相まって「変わらなさ」を一層際立たせる。現状を告発しながら、スルタナのまなざしは、かつて自分を追放したものの本質を凝視しようとするのである。

二人の男性登場人物ヴァンサンとサラも、スルタナの語りによる告発をサイドから補強する役割を担う。ヴァンサンについては次節でも検討するが、彼は

24 この小説における医学的要素の解釈については以下の論考を参照。RENAUDIN Christine, “Guérir, dit-elle : le double pouvoir de la médecine et de l’écriture”, in sld. HELM Yolande Aline, op.cit., pp.215-228.

全くの部外者の位置から、滞在するアイン＝ネフラに近い町タンマールの男たちが女を見る目つきを見て、「この女にはなりたくないな (93)」と考え、またスルタナに向かっても「きついでしょね、ここで女性であるというのは (148)」と、彼女のおかれた状況の目撃証人ともなる。サラは、スルタナやヤシンの医学生時代の友人という設定で、ヴァンサンと異なりアルジェリア内部に属する。親友だったヤシンをふって傷つけたスルタナに恨みを持つと同時に惹かれてもいる。自分も含めた独立後の若きエリート男性が、学生時代はアルジェリア初のエリート女学生たちと恋愛関係にありながら、いざ結婚となると家族の要請に従い、あっさり彼女たちを捨ててきたことなど、スルタナとの会話中でなされるサラの自己批判的語りは、『歩く人々』や『私の男たち』などでは女性の立場から語られるモチーフを男性側から語るものでもある。サラはヴァンサンに向かっても「ここでは、最も臆病な男たちでも、女を攻撃するとなると英雄的になるんです (217)」と、述べている。

告発小説として読む際に注目すべきもう一つの装置はダリラという登場人物である。タンマールのはずれにある砂丘の上でヴァンサンと出会う10歳にもならない少女という設定で、『歩く人々』の読者には、幼い頃のレイラ（主人公）との共通性が明らかである。モカデムの分身と言えるのはスルタナ以上にダリラである。レイラ同様、町外れの砂丘の上がお気に入り、そこは、男兄弟がひしめく家から逃れられる唯一の隠れ家、物理的には完全に開かれていながら、少女が孤独を確保できる場なのだ。兄弟たちの横暴に対する嫌悪、言葉に対する豊かな感受性、読書への嗜好、勉学への強い意志、ここを出て行きたいという欲望など、モカデムが『歩く人々』やインタビューなどで語ってきた自身の少女時代をここにも書き込んでいるのは明らかである。告発小説としての『追われた女』という観点から見ると、この少女の存在はどのような意味を担っているのだろうか。ダリラはヴァンサンにもスルタナにも、フランスに留学中の姉サミアの話をする。勉学の力で閉塞状況を脱し、今はフランスで自由に生きているはずの姉は、実はダリラの想像力が生み出した人物であることが小説の最後に判明する。ダリラにとって、こうなりたいという理想像だったのだ。登場人物としてのスルタナは、このダリラの前に現れた生きたモデルとみなすことができよう。一世代前のスルタナと同じ閉塞感に満ちた少女時代を過ごすダリラという存在は、この社会の抱える問題の根深さ、変化の難しさと同時に、「希望」のありかをも示唆している。その希望とは、モカデムの小説においては、この社会の変革ではなくそこからの脱出を意味する。さらに、自分の理想を空想上の姉の物語として語る行為は、モカデム自身の、作家としてフィクションを語る行為とも重なる。暴力的な幕切れの、決してハッピーエンドではない

この小説において、ダリラに関してだけは、かすかな希望が用意されているのは、今は作家となったモカデムの自己肯定の身振りであると同時に、かつての自分と同じ状況を生きる少女たちに送る、語ることで自由になる道もあり得るというメッセージなのかもしれない。

1-2 「異邦人」の物語として読む

告発小説『追われた女』が、スルタナの自己認識の変貌を語る物語でもあるとしたら、社会批判とその変貌はどのように関係するのだろうか。

1-2-1 廃墟への帰還

先に、スルタナの帰郷は告発がより有効になる形式であると述べた。しかし、スルタナは実際のところ、どこへ、或いは何に帰るのだろうか。小説の1行目は彼女がクサル唯一の袋小路で生まれたことを、2行目はその袋小路に名前がないことを読者に知らせる。「袋小路」は、小説全体が描く、アルジェリア社会の閉塞感、とりわけそこに生きる女性にとっての閉塞感を予告する。名前の欠如の方は、スルタナのアイデンティティーの不確定性と呼応すると解釈できるかも知れない。彼女の人生は、名無しの袋小路を脱出し、自分で自分の名前を獲得していく行程なのだ。

ところで、そのクサルは、今は人が住んでおらず、土壁の家々は崩壊するままだに放置されている。現在の村はその外にあり、スルタナは新たに建てられた家々の醜さを指摘するが、それもアルジェリアの現状批判の一部をなす。しかし、もと住人スルタナは、「クサルはエキゾチスムにとってしか、めったと来ないツーリストや、そこに住みはしない者にとってしか貴重じゃないの。私には理解できるわ、住民が、わずかなりとも便利さを求めて、ちょっとの雨で崩れたりしない屋根を求めて、美学を犠牲にするのを(122)」と、伝統的家屋が住み難い所であることも認識している。最初のうちスルタナはサラに、生家を見に行かないのかと問われても、行っても仕方がないと否定する。(スルタナはヤシンの住んでいた家に滞在している。) まだ、自らの過去と直面する用意ができていない。しかも、帰るとしても、そこにあるのは廃墟なのだ。「起源に帰る」ことで自らのアイデンティティーを確かめようとする行為は、あらかじめ無効を運命づけられているのだろうか。

小説の終わり近く、スルタナは砂嵐の幻影にとらわれるような精神状態でクサルに入り込み、崩れかけた家の中庭にうずくまって茫然自失しているところを、夜になって地元の少年アシル²⁵、サラ、ヴァンサン²⁶の三人の男性に発見

25 ヤシンの働いていた病院の看護師(男性)ハレドの息子。ハレドは村でスルタナの味方に付く数少ない人物の一人。アシルは、作中、肯定的に書かれる唯一の少年。

され、ヤシンの家に連れ戻される。このエピソードは、ヴァンサンが語り手の章にあり、スルタナがクサルで何を考えたかなどが内側から書かれることはない。家に戻ったスルタナは、三人を前に、独白のようなつぶやきを始める。ここで読者は、それまでに断片的に暗示されてきたスルタナの悲劇的過去を、一応時間を追ったストーリーとして知ることになる。彼女が5歳の時、父が嫉妬から母を殺して出奔し、呪われた娘として村八分の中で叔父に育てられたこと、村のフランス人医師が後見人のような役割を果たし、ついにはその医師夫婦共々、追放される形で村を出たことなどである。トラウマを言語化するという点では、クサルへの「帰還」は一定の効果をあげる。この箇所の特徴は、スルタナがほとんど演劇の台詞のように自らの過去を再現することである。そして聞き手たちは、その過去を知らない「部外者」である。「帰還」はこの時点ではまだ完了していない。スルタナは、後述するように、過去の「当事者」たちの言葉と出会わなければならない。廃墟への帰還による独白のみではなく、他者の記憶の働きかけがあって初めて、スルタナの自己認識は変貌する。

1-2-2 ヴァンサンという設定

この小説には、スルタナの複雑なアイデンティティーと釣り合わせるような形で、ヴァンサンという名の語り手兼登場人物が用意されている。複数のアイデンティティーを文字通り「体現」する人物として、40歳のフランス人男性であるヴァンサンは、アルジェリア出身²⁶ 女性の腎臓を移植されることで生き延び²⁷、小説の時点では、今や自らの一部となった「アルジェリア」を見たいと自分のヨットで地中海を渡り²⁸、さらには砂漠を見たいとタンマールまで来て、スルタナやダリラと出会う。体内に、性別においても出自においても「他者」である存在をかかえ、そのおかげで生きているヴァンサンは、“*identité*” (アイデンティティー) という言葉が、医学的、心理学的、社会学的に多様な意味を持って機能する場そのものである。提供者が現れた時、医師はヴァンサンに

「ショヴェさん、あなたは提供者の腎臓と完全な組織的一致 (*une totale identité tissulaire*) をお持ちですよ！前例のない、例外的幸運ですよ！

26 「アルジェリア人女性 (*Algérienne*)」ではなく「アルジェリア出身 (*d'origine algérienne*)」という表現が用いられている。現代のフランス語でごく普通に使われる表現だが、これによって国籍を決定することはできない。

27 通常、提供者のアイデンティティーは受け取る側には伝えられないと思われるが、この小説では、ヴァンサンが無理に尋ね、「27歳のアルジェリア出身女性」であることだけ知らされる。

28 『追われた女』ではヴァンサン、『ンジド』ではノラ、『欲する女』ではシャムサがヨットウーマンである。モカデム自身も、フランス人の夫がヨットマンだったことからヨット経験がある。

(39)」

と言う。従って、ヴァンサンは、彼に腎臓を、言いかえれば命を与えてくれた女性について、自分と「同じアイデンティティー (même identité) をもった異邦人 (étrangère) (43)」という矛盾した言い回しが成立してしまう存在なのだ。しかも、移植を受ける前から、すでに、父は「ガスコン (87)²⁹」と特定されるフランス人、母はポーランド系ユダヤ人という「複数性」も持っている。

このような登場人物（しかもスルタナに準じる語り手ともなる）は、『追われた女』の中でどのような役割を果たすのだろうか。いささか無理のある設定と言うこともできるが、モカデムが腎臓病専門医であることも影響しているのだろう。ヴァンサンは、両親の出自が異なっているとしても、ヨーロッパの枠内には収まっているし、自分がフランス人であるという点に関しては安定した自己意識を持っていた。そこへアルジェリア人女性という、これまで全くの他者だと思っていた存在が闖入する。現代フランスであれば、民族や出自の違う人々の間で臓器移植がおこなわれる可能性は充分にある。ヴァンサンは、アイデンティティーの問題が、フランス人であることに何の疑いもなく生きてきた人にも関わりうることを、決して「南」からフランスにやってくる人々やその子孫だけが直面する特殊な問題ではないことを示す機能を果たす。スルタナとヴァンサンが語り手としてはほぼ「対等」に配置されているのは、このテーマを、「南」出身者に固有のものとみなすことの拒否なのかもしれない。それどころか、「自分自身がいくつものとらえ難い存在に分解したように (149)」感じ、「それはもう存在しないということでしょう？ (149)」と問うスルタナに対し、ヴァンサンは、「逆ですよ。絶対的自由の中にあるということなんだ。肉体の、時間の、偶然性の外に (149)」と、複数のアイデンティティーを抱えることを全面的に肯定する。複数性を受け入れることが生きることと同じを意味を持つこの登場人物は、スルタナがあらためて自らの複数性を引き受けるのを助けるという役割を果たすのである。

1-2-3 「異邦人」であることを引き受ける、さらに

スルタナはどのようにして、「分解した」存在となったのか。直接的には、両親の悲劇的事件が、彼女を「呪われたもの」として村八分の対象にするのだが、彼女の「異質性」は、それ以前に始まっている。母は村の出身者だが父は余所者であること、父が母を愛しすぎたこと（傍目にわかるほど、そして嫉妬妄想から殺人に至るほど）、さらには娘を愛しすぎたことなどが、すでに、村の慣習にそぐわないとみなされており、その両親から生まれた少女を排斥する

29 フランス南西部ガスコーニュ地方の出身者。

原因となる。特に父が娘を「愛しすぎた (254)」証拠とされるのは、彼が、村で初めて娘を学校（独立以前であり教育はフランス語）に入れたことである。これによって、スルタナは決定的に異質分子となり、「まるでよそから来たよう (254)」とみなされるのである³⁰。その後、中学生の頃、新たに村に赴任してきたフランス人医師夫婦が、完全に孤立し拒食症をわずらう³¹ スルタナを援助する一種の保護者となる。すると今度は「キリスト教徒の売女 (227)」とののしられる。2年後、この医師夫婦もこの地方から追放されることになるが、そのころ叔父を亡くしたスルタナをオランのリセに入れる手はずを整えてくれたおかげで、彼女は医師夫婦と共に村を出る。そしてオランの次にはフランスへ渡るのである³²。

このような経歴が、統一的で安定したアイデンティティーを持ちにくくすることは想像に難くないが、そもそも、上記のような「自伝的」ストーリーは、『追われた女』の中でどのようにつくられるのか。いかに排斥され、ののしられ続けたかという部分は、クサールから連れ戻された夜のスルタナの自己語りに基づく。しかし、両親をめぐる話は、事件当時5歳であったスルタナの記憶や理解力によるものではあり得ない。小説の結末部分に近く、村の女性たちが、スルタナを囲んで話し込む場面がある。彼女に、自分自身の異質性の元となる物語を語るのは、この女性たち、特にスルタナが生まれる以前の状況をも知る人々である。言い換えれば、スルタナのアイデンティティーは、少なくとも部分的に、他者の記憶に基づいて形成されるのである。これはスルタナだけの特殊事情とは言えない。人は皆、他者の言語なしには、自分とはだれか、のストーリーを自分に語ることにできないのである。

スルタナの場合、村に帰るまで、村人はすべて自分を排斥し追放した加害者であるとみなしてきた。しかし、この女性たちとのやりとりは、彼女に、「父に愛された娘」という自己肯定感を強化する物語³³ を与えてくれる。また、彼女たちの、ひそかにスルタナの境遇に心を痛めていたが何もできなかったという告白は、半信半疑ながらもスルタナの側のかたくなな心を開く契機となる。この女性たちとの新たな関係の顛末については次章で考察するが、スルタナの

30 父の出奔後、フランス人医師の保護を受けるまで、村中から排斥され、しかも女性の教育に対して敵対的な環境の中、どのようにして学業を継続し、読書に夢中になれたのか作中に説明はない。

31 拒食症もモカデムのヒロインに多い。モカデム自身が長年拒食症であったことをインタビューなどで繰り返し述べている。

32 この「恩人」とも言える夫婦とのその後関係は、しかし、テキスト中、ほとんど言及されない。あたかも、スルタナを村から脱出させるためにのみ存在したかのよう。

33 「父に愛された娘」というモチーフについては次章でも取り上げる。

帰還の一部は、彼女の異質性を肯定的に確認し直すことに貢献すると言えるだろう。

では、村の路上、病院、タンマールのホテル、タクシーなど、公的空間での帰還体験はどうか。村長のイスラム主義者バカル³⁴、彼の腹心でタクシーの運転手アリ・マルバフ、村の少年たち、ホテルのバーの客たち（地元民で全員男性）、そのすべてが、視線と言葉の暴力でスルタナに迫る。この面では、スルタナは、過去の経験を繰り返している。しかし、「もう、無力な子供ではない（189）」スルタナは「反撃」する。それは暴力に対する暴力、排斥に対する排斥ではない。公道を歩き、病院で診察し、ホテルのバーで男性（サラ、ヴァンサン）と話し酒を飲む、男性と同じ屋根の下に宿泊する、といった行為を堂々で行い、怖がってはいないということを見せつけるのである。（しかも、医師であるという優位な立場には、バカルですら、一定の譲歩をせざるを得ない。）かつてと同じ、あるいはさらに強くなった男たちによる圧力は、スルタナに自らの異質性を再確認させると同時に、それこそが今の自由な自分をつくっているのだということを教える。従って、最初はまだ「私はむしろ間にいるの、境界線上に、あらゆる断絶の上に（65-66）」と、出自に規定され安定した一つのアイデンティティーにおさまりきらないことに不安を表明していたのが、「どんなに居心地が悪くでも、どこでも異邦人であるというのは、評価しようのない自由でもあるの。何とも取り替えるつもりはないわ（191）」と変化するのは、これらの男たちによる暴力のおかげなのだ。

スルタナは、村の女性たちの語りからわかるように、出生からして異邦人の要素を持ち、子供時代すでに、村の生まれなのに「よそから来たよう」と言われ、さらに排斥によっていっそう異質性を強調される。彼女は、異質であることの痛みをいやというほど知る。その後、オランへ、フランスへと、文字通り異邦人として暮らす経験（ただし、そこで村でのような排斥を受けたという経験は書かれていない）を経た上で、今回の帰還がある。告発小説が暴くような現状によって今一度暴力の対象とされることにより、故郷にあって自分は異邦人なのだとすることを再認し、しかも、それこそが自分を作っているのだということを知る。さらには女性たちの語りによって、かつては否定的でしかなかった要素に肯定的面が付け加わる。小説の末尾で、極点に達した男たちの暴力（放火）によって再び村を出るスルタナは、「異邦人であることは悲劇ではないの。苦しみも多い豊かさなのよ（253）」と、より強化された異邦人性を引き受けているのである。

34 彼は、スルタナの母との結婚を当て込んでいたのに余所者に奪われた、という過去がある。

空港から客として乗せた女性を、最初は、村出身のスルタナであると認識できなかったアリ・マルバフは、後にそれを知ると「お前がだれか知っているんだぞ (128)」とスルタナを脅迫する。『追われた女』は、この脅迫に、私はあなたが知っていると思い込んでいるものとは違う、あなたの知らない、知ることのできない異邦人なのだ、と応答するテキストなのだ。

2 ハイブリッド・ヒロイン

『追われた女』のダリラは、スルタナにむかって「あんたは本物の混じりもの (une vraie mélangée) ね (134)」と言う。現代フランス語の通常の用法では、人間にたいして “mélangée”³⁵ という単語を名詞として用いることはない。これはダリラ独自の表現である。少女は、自分たちは「本物 (134)」で、「向こうで勉強すると、いつも本物の混じりものになるの (134)」という使い分けをするが、「自分たち本物」と言うんだけど、私自身が本物かどうかはわからない (135)」とも言う。「自分たち本物」はアルジェリアから出ないアルジェリア人、「本物の混じりもの」は、混血を指すのではなく、アルジェリア出身でフランスへ渡った人を示すようだ。「混じりもの」という語は、純粋ではなく雑種性を持つものを意味するが、それに「本当の」という形容詞がつくと、純粋性よりも雑種性により価値をおくというニュアンスが現れる。だからこそ、スルタナはダリラのこの表現が自分にふさわしいと言う。本章では、この、「本当の混じりもの」をヒロインとする『追われた女』『ンジド』『欲する女』の三作を比較しながら、複数性を引き受けた存在の様々な可能性を探っていきたい。

2-1 消える「親」と複数の「起源」

三作のヒロインは、家族、出身地などの要素が多様に組み合わせられているのだが、そこには共通点も見えてくる。

『追われた女』のスルタナの場合、父は砂漠の部族の出身とされ、母の出身地であるアイン＝ネフラの村人にとっては余所者である。また、地元民の母も、その一族はかつて、サハラ砂漠の南から移動してきたという。この設定には、父方が遊牧民であること、肌の色や髪の特徴などからアフリカ系の先祖をどこかに持つらしいなど、モカデム自身の伝記的要素が色濃く反映されている。スルタナは、アイン＝ネフラの生まれ育ちという設定である。

『ンジド』の主人公ノラの父はアイルランド人、母はアルジェリア人、ノラ

35 動詞 *mélanger* (混ぜる) の過去分詞女性形。

自身は、父母が出会ったパリ生まれという組み合わせは、『追われた女』の場合とかなり異なるが、母が、娘の人生から早くに姿を消す点では共通する。ノラの母は、ある日突然、夫と娘を残してアルジェリアに帰る。ノスタルジーがその原因とされるが、夫も娘も非常に愛していたとあるだけにいささか説得力に欠ける。『追われた女』『ンジド』のどちらにおいても、アルジェリアへの帰還はそこからの出発³⁶よりも理由の現実味が弱いように思われる。また、『ンジド』には、父と娘との親密な共生関係が書き込まれている。この点では、『イナゴの世紀』に近い³⁷。

『欲する女』のシャムサに至っては、父母ともに不明である。砂漠地帯の町で捨てられ、オランで育つ。育てるのはフランス人キリスト教修道女たちである。物語の現在において成人しているシャムサはフランス在住でフランス人の恋人がおり、テキストには、その両親（双方ともフランス人）との関係が、むしろ恋人との関係よりも多く書き込まれている。

モカデムのヒロインたちは、自身の移動によって「リゾーム的アイデンティティー」を持つ以前に、スタート地点（両親）の設定によってすでに異質なものを内に複数抱える存在である。そして、三者に共通するのは、どの娘も、両親に捨てられる（早い死あるいは失踪、及び文字通りの遺棄によって）ことである。そして、血縁とは無関係の人物が彼女たちの人生において重要な役割を果たす。スルタナは叔父に引き取られるが（ただし、この叔父について具体的記述は一切なく、引き取ったことと亡くなったことが一言ずつ述べられるのみ）、スルタナを救うのは、フランス人医師夫婦である。ノラも、母の家出後、血縁ではないアルジェリア人女性ザナにかわいがられる。シャムサの場合、そもそも親ではなく修道女たちに育てられる。血縁者ではなく他者、しかも、スルタナとシャムサでは、民族や宗教、言語などの点でも「他者」と呼べる人々が彼女たちを救済し援助する。

見方を変えると、これらのテキストは、血縁の父母を消去して娘を語る物語なのだ。モカデムが父母のみならず「多すぎる」家族（彼女は13人兄弟の第1子）との様々な葛藤を経験してきたことはよく知られている。ハイブリッドなヒロインたちは、モカデムの、「起源」に規定されることへの拒否の表現であるということもできよう。家族制度や単一であることを要求するアイデンティティーのあり方から自分を解放しようとする娘の戦略は、複数の「起源」の持ち主を肯定的に語ること、「他者」を豊かさとして内に持つことの積極的意義を語ることなのである。

36 ノラの母も自由を求めて渡仏したという設定。

37 『イナゴの世紀』では、母が行きずりの暴漢に殺された後、父が一人で娘を育てる。

2-2 恋人と他者性

三作のヒロインたちには、消える親や血縁以外の保護者だけではなく、様々な「他者性」を持った恋人あるいは恋人候補者がいる。

『追われた女』でスルタナをめぐる三人の男性のうち、恋人とはっきり述べられているのはヤシンのみだが、そのヤシンはテキストの始まる時点ですでに亡くなっており、スルタナの幻想にのみ現れる。彼はカビリー人³⁸で、村の病院で働いていたころ、村でただ一人の異邦人だった。死亡していること、唯一の異邦人、一途に恋人を愛する人物だった³⁹など、スルタナの父と共通項が多い。前章で取り上げたサラとヴァンサンもスルタナに惹かれている。この三人は、村の“interdite”であったスルタナを、あらゆる場で愛される女性とする役割を果たす。ヤシンは故郷で愛してくれる男、サラはアルジェリアで、ヴァンサンはフランスあるいは地中海上で愛してくれる。ヴァンサンの複数のアイデンティティーがこの小説で持つ重要性もすでに述べた。しかし、スルタナは、選ぶことができないという。

「選ぶこと、止まることをどんなに恐れているか、どうやったら彼らにわかってもらえるだろう？ 私が生き残れるのは移動の中、移住の中だけということをわかってもらえるだろう？ (234)」

この時点ではまだ、スルタナには、自由であることに対する自信が充分ではない。それに対し、自立したヨットウーマンのノラとシャムサは、小説中、ずっと移動し続けるが、だからといって選択した恋人がいないわけではない。

『ンジド』では恋人は一人（アルジェリア人ジャミル）だが、ノラに惹かれつつある男性も一人（フランス人ロイック）登場する。『欲する女』では選択はすでになされていて恋人一人（フランス人レオ）である。特徴的なのは、ヤシン同様、ジャミルもレオも、テキスト中、物語の現在に登場人物として現れることがない点である。ジャミルについては、小説の最後にノラはその死を知る。レオがずっと不在なのはテロリストに誘拐されたからで、こちらは最後に救出されたことが判明する（無事だという電話での短い言葉のみが物語の現在における登場場面）。『追われた女』は二人の男性が選ばれないまま終わり、『ンジド』では、残ったのはロイック一人だが、ヒロインとの関係の将来性については未定のまま終わる。『欲する女』では、小説の始まる前に一人が選

38 北アフリカの先住民ベルベル人のうち、アルジェリアのカビリー地方出身者。アルジェリアの人口の20～30%はベルベル人であり、独自の言語や文化を持つ。

39 スルタナとヤシンは愛し合っていたが、結局スルタナは自由を求めて渡仏。ヤシンは、スルタナの出身地に来て働くことを選択し、サラの証言によれば最後までスルタナを愛していたという。

れていて、最後まで変わらない。スルタナにできなかった「選ぶこと」が完了しているのだ。だが、シャムサは移動をやめたヒロインではない。その逆である。三作を通じ、恋人（ないしその候補者）の数は減っていき、しかもその男性たちの持つ「複数性」も減少していく。それに反比例するように、ヒロインの方の「複数性」は上で見てきたように増加する。シャムサは最も「起源」から遠く、「他者」とその言語、文化によって育ったのだが、この小説では、フランス人レオの方がシャムサの援助を受ける側であり、その救出を実現するのは、シャムサの「移動」（単独航海、イタリア、チュニジアなど地中海沿岸における主体的行動、そしてそもそもレオに会う前提条件のフランスへの移住）にほかならない。ここではもう、「過剰な」他者的要素を集めた恋人は必要ないし、他者を、自由を阻害する要因として警戒する必要もない。「他者性」を自らの一部とするアイデンティティーは正面切って引き受けられ、移動は自信を持って自立的に行われる。

スルタナの不安を乗り越える語りがここにはある。

2-3 言葉を混ぜる

アイデンティティーが、異質な複数の要素から成り立つ時、言葉はどうなるのだろうか。『追われた女』のダリラが、ヴァンサンやスルタナと話す箇所は、フランス語表記のところどころにイタリックでアルジェリア語（アルジェリアで使われているアラブ口語を指す。この小説ではアラブ語という表現はされない）が挟まれる。ある時、そのアルジェリア語の単語をフランス語に直したスルタナに対し、少女は「あんたはキリスト教徒⁴⁰ みたいに直すのね。（中略）私たち本物のアルジェリア人はいつも言葉を混ぜるの（134）」と返す。「本物」の方が言葉を「混ぜる」わけである。先にも述べたように、アイデンティティーの問題に関して、ダリラはスルタナを「本物の混じり物（134）」とも言い、これに対しスルタナも「混じり物しか本物じゃないのよ（135）」と、純粋性よりも混じっている状態の方を評価する見方を示している。しかし、『追われた女』自体はフランス語で書かれている。ダリラは、中学校教師ウアルダ宅でベビーシッターをしたことから彼女の保護のもとにフランス語を学んでいるらしい。ダリラやウアルダを通して語られる学校教育（古典アラブ語による⁴¹）は、保守頑迷で権威主義に凝り固まり、「馬鹿と小イスラム主義者の製造工場（130）」

40 原文で “roumi”。これ自体アラブ語で「キリスト教徒」を意味する。

41 独立後、教育はアラブ語化されたが、それは人々が日常話す口語アラブ語（アルジェリア語）ではなく、古典アラブ語によるものだった。両者の差は大きく、ダリラの両親も、古典アラブを解さない。

にすぎない。フランス語のみが評価されているわけではなく、スルタナはダリラに、独立時のアルジェリアには、マグレブのアラブ語（口語）とベルベル語、フランス語という複数の言語があったこと、古典アラブ語もそれ自体が否定的価値を持っているのではなく、イスラム主義者などが悪用していると教える。しかし、ダリラの具体的で生き生きとした台詞に対し、スルタナの説明がいささか教条的なのは否めない。テキストから読者が受け取るのは、ウアルダのフランス語による教育の自由さと豊かさ、公立学校でのアラブ語教育のひどさなのである。混じり物の価値化も、あくまでフランス語あつてのことだということとは指摘しておかねばならない。また、村のイスラム主義者や女性たちとスルタナとの会話がフランス語で表記されるのは、テキスト全体がフランス語で書かれている以上避けられないのだが、ダリラとの上記引用部分を除いて、言語問題は前景化されない。スルタナは、アイデンティティー上の問題をかかえた人物だが、そこに言語使用上の葛藤は含まれていないようだ。

『ンジド』の冒頭で、意識を取り戻した主人公は、自分が誰なのかを含め記憶を失っていることに気付く。そこから始まる「自分探し」の過程では、早々に言語が主題になる。主人公は海上のヨットに一人きりなのだが、そこは多言語世界である。ラジオから聞こえてくるのは英語の他、アラブ語、スペイン語、イタリア語などの地中海沿岸言語であり、船上に見られる書かれた言語（航海日誌、航海図、書類、本など）はフランス語である。ここでも、テキスト全体はフランス語で書かれているため、主人公（この時点ではまだ名前は不明）の思考内容もすべてフランス語だが、主人公とフランス語との関係は自明ではない。

「この言葉（フランス語-筆者注）は彼女とどういうつながりで結ばれているのか。血のつながり？戦争？分裂？亡命による混血？どちらにせよ。

養母語はかならずしも母の言葉ではない。彼女はそのことを忘れてはいない⁴²。」

自分の名すら思い出せない状態にいる主人公に「忘れていないこと」として与えられているのが「養母語はかならずしも母の言葉ではない」という内容なのだ。母と、一つの言語と、統一された単一アイデンティティーの結びつきは自明ではないという主張である。なお、「養母語」は、モカデム独自の表現の一つであり、いくつかの重要なテーマに関わるキーワードなのだが（前掲拙論2013参照）、『ンジド』の文脈に限れば、主人公ノラの母はアルジェリア人なので、ノラの「母語」はアラブ語、「養母語」はフランス語である。上述のよう

42 N'zid, p.16.

にノラは母に「捨てられる」ため、「母語」ともいったん切り離されている。小説冒頭に言語をめぐる興味深い問いかけがあるにもかかわらず、作中、ノラが自身の言語使用について葛藤するような場面は用意されていない。

ヒロインの出自に関わらずフランス語使用が最も肯定的に扱われるのは『欲する女』である。シャムサはスルタナ同様、生まれ育ちはアルジェリアだが、環境は全く異なる。シャムサの場合、アルジェリアにしながら一貫してフランス語環境で育ち、「母語」が欠如して「養母語」が優先する点では、ノラ以上である。三つの小説を見ていくと、それぞれのハイブリッドなヒロインは、多言語状況を生き、「母語」は後退し「養母語」が優先する、という点で共通する。モカデム世界において言語は「混じる」ことが常態であり、一言語の独占や母語偏重は批判される。それを前提としたフランス語使用については、葛藤が描かれることがない。マグレブ作家なのだから、当然、そうした葛藤が書かれるはずという「期待」は裏切られる。前掲拙論でも述べた、「母」との困難な関係がその根底にあるにせよ、「母語」以外に、自分にとってより自由に豊かな表現が可能な言語（それが「養母語」と呼ばれる）があるのなら、それを用いることをなぜ躊躇わねばならないのか、「期待」に添えないかもしれないが、かわりに、「養母語」で、このようにハイブリッドな存在の表現が可能なのだ、とこれらのテキストの書き手は主張しているのではないだろうか。

2-4 移動の先へ

三作比較の最後に、移動を特徴とする⁴³ ハイブリッドなヒロインがどのような状態にあって小説が終わるのを考察し、彼女たちの果たす役割と可能性を探りたい。

三つの終わり方のみを比べると、『欲する女』は、任務達成とハッピーエンド、『ンジド』は恋人の死を知るという悲劇的結末ではあるが、ヒロインが記憶を取り戻すという点からみるとやはり一つの課題が達成されており、また、次の目的地に向けての出発が表明されて終わっている。これらに対し、『追わ

43 この移動を、以下にまとめて再確認しておく。『追われた女』の舞台は一貫してアルジェリアであり、スルタナの移動（アイン＝ネフラ、オラン、モンペリエ、アイン＝ネフラ）は、彼女の語りの中のみにある。『ンジド』は地中海上（ペロポネソス半島とイタリアの間）に始まり、そこから、おおよそ西方へ向かって常に移動し（途中短時間の寄港あり）、スペインのカダケスに到着したところでテキストは終わるが、次に父の出身地であるアイルランドのゴールウェイに向かうという意志が表明される。『欲する女』では、物語の現在は、地中海上の航海（出航地はモンペリエ、最後に同じ場所に寄港する途中でテキストは終わる）とチュニジア沿岸部で展開する。この作品における移動で重要なのは、現在の海上移動のみではなく、ヒロインが、アルジェリア南部の砂漠に生まれたその翌日に1000キロを移動してオランに来たという設定であろう。

れた女』の結末は、その「未完成」なことに特徴がある。物語内容としては、タンマールの町へ出かけ、ヴァンサン、サラと共にアイン＝ネフラに帰ってきたスルタナは、村に入る前に、数日前から滞在していたヤシンの官舎が燃えているのに気付く。看護師ハレドが駆けつけ、彼女たちに、村長に率いられたイスラム主義者たちがヤシンの家に放火、それを知った村の女性たちが村役場に火を放ち、村の中心部で大混乱がおきていると告げる。さらなる混乱や、ハレドとその家族（スルタナの味方）に危害が及ぶのを避けるため、スルタナたちは引き返すことにする。最後に、村の女性たちに「遠くにいても、私は彼女たちといっしょにいる（264）」と伝えてほしいとハレドに頼んで、スルタナたちは出発する。

この結末は、どう読めるだろうか。メルツ＝バウムガルトナーと共に「断絶でも逃亡でもなく、移動するリゾーム的アイデンティティの象徴的行為⁴⁴」と解釈できるだろうか。スルタナの村からの出発は2回ある。かつて、フランス人医師夫婦もろとも、追われるように出た経験。そして、今回の出発。たしかに、過去の、村全体から排斥されての追放に比べ、今回は、女性たちやハレドなど味方もある。また、帰郷はしたもののスルタナはそもそも村に再定住するつもりはない。だが、意図していたのとは違う形で、暴力的に追放されたという面は否めない。村人の中の暴力的衝突が書き込まれるのは、90年代アルジェリアの社会状況を示唆するものでもある。しかし、それだけではない。この暴力的結末は、スルタナが村を出ることを「正当化」するものでもあるのではないか。この結末に至る直前、男性支配に反旗を翻そうと準備しつつある村の女性たちは、スルタナに、村にとどまってリーダーになってほしいと懇願する。しかし、彼女には、「本物の混じり物」である自分が村の女性たちとは異なり、定住して彼女たちに同一化するのは無理だという自覚がある。特に、村の伝統的行動規範の一部を尊重し、男女関係に関してもう少し大人しくしてほしいという要請は⁴⁵、スルタナにこの違いを決定的に悟らせる。

「私は何も諦めない、って言っても、私はあなたたちの一員でいられるかしら。それに、あなたたちの一員ってどういう意味？私は、部族も家族ももたなかったおかげで、習慣や合意事項の強制や偽善から解放されてきた。不公正に対する反抗と、本当に自由を望むというのは、別のことなの。はるかに大きな一歩、時には断絶を要求する、もう一つ別のことなの（249）。」
 というスルタナの主張は、女性たちには全く理解されない。この展開は、少な

44 MERTZ-BAUMGARTNER, op.cit., p.128.

45 主にスルタナが、ヤシンの官舎に一人で宿泊し、サラやヴァンサンが同じ屋根の下で夜をすごしたりしたこと、男性たちによけいな刺激を与えないようこの要請が出る。

くとも『追われた女』の時点では、「断絶」も「逃亡」も必要である、ということの意味しているのではないか。村の女性たちの懇願は、「エリート女性は、ようやく立ち上がろうとするサバルタン女性たちのもとにとどまってほしい」という、マグレブ女性作家に対する、フェミニスト的、ポストコロニアル的読みの要請でもある。その要請を十分に知りつつも、個人の自由への希求を優先させたければ、火と暴力による追放という結末をもって「正当化」し、しかし同時に「断絶」を引き受けて再出発することが必要だったのではないだろうか。

『ンジド』のノラは、いったん「白紙」に戻ったアイデンティティーを取り戻すわけだが、それは始めから複雑なモザイク模様をなして、取り戻した後も、スルタナのようにそのハイブリッド性に苦しむことはないし、先に述べたようにこの点で『ンジド』は一つの課題を達成して終わる。しかし、スルタナが最終的に砂漠あるいはアルジェリアを断ち切って「北」へ向かったのと類似の動きがここにもある。それは、小説の終わりに判明する、恋人のアルジェリア人ジャミルの暗殺である。ここでも、断絶は暴力的に、アルジェリアの側に起因して起こる。ノラはスルタナ同様、アルジェリア（母の出身地でもある）との関係から「追放」されるのである。アルジェリアへ行くのかと問う恋人候補ロイックに、ノラはまだ行かないと答える。そして今は父の出身地アイルランドのゴールウェイへ航海する意志を表明してテキストは終わるのだが、その直前まで、ゴールウェイへの航海を予期させる内容が何もないため、いささか唐突の感が否めない。これはむしろ、南の「母語」世界との関係を、いったん断ち切ること、モカデムにおいては北と関連する「養母語」世界で書いていくという作家の意志表明として読めるのではないだろうか。

三作中、最も身元不明のヒロインを擁する『欲する女』は、出航から帰港一歩手前までという移動の、円環が閉じられる直前で終わる。シャムサはノラとは異なりアルジェリア生まれだが、スルタナが命がけで主張しようとした個人の自由、家族、部族及びそれに伴うあらゆる習慣や強制からの自由を達成している。それを可能にしているのがいくつかの移動、砂漠からオランへ、アルジェリアからフランスへ、そして生みの親から養親たちへという移動である。物語の現在におけるレオの誘拐、砂漠での幽閉、そこからの脱出劇は、シャムサの脱出を再現する語りとして読むこともできる。すでに自由なシャムサが、今度は、砂漠の囚われ人の脱出を助けるのである。「帰港」へ向かう結末だが、帰るべき場所はすでに、「起源」からはるかに遠い。あるいは、「起源」自体移動できる。そして、移動する「起源」を生きること、「どこかで異邦人であること（253）」は、アイン＝ネフラの女性たちが同情をこめて言っていたような「悲劇（253）」ではない。『欲する女』の「ハッピーエンド」はそう主張してい

るように思われる。

おわりに

三つの小説のタイトルを見ると1993年の『追われた女』では受動態の表現（過去分詞）が、2011年の『欲する女』では能動態の表現（現在分詞）が用いられている。そして間に入る『ンジド』は「生まれる、続ける」という二つの意味を持つアラブ語である。スルタナは二度目の脱出時にも、二人の男性に付き添われているが、ノラとシャムサはヨットで単独の航海が可能であるし、ノラの場合、最後の場面にロイックがいるにせよ、次の航海へ一人で出発するつもりであり、『欲する女』の結末部において、シャムサは海上で完全に一人である。ヒロインは、移動し、複雑なアイデンティティを積極的に受け入れるだけではない。単独者として自立していく。単独者であることは、集団による強制や抑圧から自由であるが、決して孤立を意味するのではない。『ンジド』以上に『欲する女』では、レオを救出するために、レオの父からチュニジアの友人まで、他者との協力、相互理解が描かれる。

『ンジド』と『欲する女』の間には、「小説」と銘打たれていない『不服従者の恍惚』と『私の男たち』、および「小説」ではあるが自伝的要素が顕著な『すべてはあなたを忘れたおかげ』が書かれている。『ンジド』で、文字通りアイデンティティ白紙状態のヒロインが最大限「混ざった」ものとして立ち上がって行く可能性を書いた後、再度自伝的エクリチュールによって自らのアイデンティティと向き合ったモカデムは、「生まれ（なおし）、続けて」、砂漠に起源を持ちつつも混ざったことと移動することで自由を獲得する単独者を書く。もはや、匿名の何かに“interdire”される存在ではなく、自ら能動的に欲し、名を与えることのできる（「欲する女」は船名で、シャムサが新たに与えるもの）存在の航跡は、養母語で書く「混ざった」作家の「筆（エクリチュール）跡」でもあるだろう。

Malika Mokeddem の作品

Les hommes qui marchent, Ramsay, 1990.

Le siècle des sauterelles, Ramsay, 1992.

L'interdite, Grasset, 1993.

Des rêves et des assassins, Grasset, 1995.

La nuit de la lézarde, Grasset, 1998.

N'zid, Seuil, 2001.

La transe des insoumis, Grasset, 2003.

Mes hommes, Grasset, 2005.

Je dois tout à ton oubli, Grasset, 2008.

La désirante, Grasset, 2011.

参考文献

AAS-ROUXPARIS Nicole, “Interdiction et Liberté dans *L’Interdite* de Malika Mokeddem”, in sld. HELM Yolande Aline, *Malika Mokeddem : Envers et contre tout*, L’Harmattan, 2000, pp.157~173.

BÉNAYOUN-SZMIDT Yvette, “*L’Interdite* de Malika Mokeddem ou sur-vie d’une écrivaine en marge de sa société”, in sld. REDOUANE N., BÉNAYOUN-SZMIDT Y., ELBAZ R., *Malika Mokeddem*, L’Harmattan, 2003, pp.99~119.

BOIDARD BOISSON Cristina, “*L’Interdite* : jalon essentiel dans la lutte de Mokeddem contre l’obscurantisme en Algérie”, in sld. REDOUANE Najib, *Les écrivains maghrébins francophones et l’islam. Constance dans la diversité*, L’Harmattan, 2013, pp.369~384.

MERTZ-BAUMGARTNER Birgit, “Identité et écriture rhizomiques au féminin dans *L’Interdite* de Malika Mokeddem”, in sld. REDOUANE N., BÉNAYOUN-SZMIDT Y., ELBAZ R., *Malika Mokeddem*, L’Harmattan, 2003, pp.121~136.

“《Jeux du Je》 : Hybridité et dé-localisation dans l’œuvre de Malika Mokeddem”, in eds. GEHRMANN S. et GRONEMANN C., *Les enJEux de l’autobiographique dans les littératures de langue française. Du genre à l’espace. L’autobiographie postcoloniale. L’hybridité*, L’Harmattan, 2009, pp.125~138.

ORLANDO Valérie, “Écriture d’un autre lieu : la déterritorialisation des nouveaux rôles féminins dans *L’Interdite*”, in sld. HELM Yolande Aline, *Malika Mokeddem : Envers et contre tout*, L’Harmattan, 2000, pp.105~115.

RENAUDIN Christine, “Guérir, dit-elle : le double pouvoir de la médecine et de l’écriture”, in sld. HELM Yolande Aline, *Malika Mokeddem : Envers et*

contre tout, L'Harmattan, 2000, pp.215～228.

武内旬子 「アルジェリア女性による90年代フランス語表現文学」『神戸外大論叢』、第51巻、第5号、2000年10月、pp.41～72.

「マリカ・モカデム 砂漠からエクリチュールへ（前）」、『神戸外大論叢』、第53巻、第5号、2002年10月、pp.99～135.

「マリカ・モカデム 砂漠からエクリチュールへ（後）」、『神戸外大論叢』、第53巻、第7号、2002年12月、pp.1～21.

「マリカ・モカデムと不穏な小説 ―母と娘と嬰兒殺し―」、『神戸外大論叢』、第60巻、第2号、2009年9月、pp.45～66.

「砂漠の作家の海洋小説 ―マリカ・モカデムの「養母語」文学の可能性―」、『神戸外大論叢』、第63巻、第2号、2013年3月、pp.107～126.

「母―語は変わる ―アジア・ジェバールとマリカ・モカデムにおける女性三世代の変容―」、『神戸外大論叢』、第64巻、第3号、2014年3月、pp.99～117.